

## 三位一体の主日

福音朗読 ヨハネ 3・16-18

2023.6.4 9:30 ミサ  
カトリック高円寺教会  
主任司祭 高木健次神父

今日、わたしたちは三位一体の主日のごミサをお捧げしています。三位一体、父と子と聖霊ですね。三位一体という言葉そのものは聖書には出てこなくて、その父と子と聖霊のことを理解しようとして、300年ぐらいあとに使われ始めた言葉ですけれども、今日お祝いしているのは、神様がご自分に対して「父と子と聖霊」と呼び掛けるように、長い救いの歴史の中で、そして最後にイエス様を通して教えてくださったご自分の呼び名、わたしたちが神様をどのようにお呼びしたら良いのかを教えてくださったということに改めて感謝をし、そしてそこに希望の土台があるのだということを思い起こす、そのような祭日であると思います。

わたしたちは、今日のごミサの最初にも、そしてまたそれぞれ色々な場面でお祈りをするときに、最初にもそして最後にも「父と子と聖霊のみ名によって。アーメン」という言葉を使います。「父と子と聖霊」というお名前によって、アーメン。「アーメン」というのは「揺るがない」という意味です。「信じます」というふうに説明されることもありますけれども、それは揺るがないからこそ信じていることができる、ということです。

わたしたちは神様のことを完全に理解することはできません。父と子と聖霊そのものも神秘であります。しかし、そのお名前だけは、少なくとも神様が教えてくださったのだ、そのことは揺るがない。それは何故かと言えば、名前を知っているということは、相手と関係がある、繋がっている、ということの最もはつきりとした証拠であるからです。だからこそ、わたしたちは神様と繋がっている。そのことは、わたしたちがどんなに揺らぐ存在でも、どんなにダメでも、でも神様と繋がっていて、その神様にどのように呼びかけたら良いかを教えていただいている、関係があるということは揺るがないのだと、そのことに信頼をする。

「父と子と聖霊のみ名によって。アーメン」は、そういう信仰告白の言葉である、そういう神様との繋がりを確認する言葉であると言えます。この「父と子と聖霊」は、人間がずうっと聖書を勉強してたどり着いた結論ではなくて、神様のほうが

教えてくださったお名前なんだ、ということ、それをわたしたちは忘れてはならないわけです。

今日は特に、お名前を、どのように呼びかけて良いのかを教えていただいた、ということを中心に改めて考えたいです。神様との関係もそうだし、そしてまたわたしたち人間同士も、相手の名前を知っているということは、相手と繋がっているということの第一番目のしるしであると言えます。時々もの忘れをして相手のお名前が出て来ないということもありますけども、でも少なくとも知っているという、忘れちゃったけど知っているという事実はあるので、その関係の一つのしるしですね。そういう意味で、それぞれの相手が自分の名前を知り、また自分も相手の名前を知ることが決して当たり前ではない。それはある意味で神様によって出会わせていただいた人と人との繋がりのお秘であるとして、本当に大切なものとして、その前である意味で頭を下げる、尊重する、尊敬する、その思いを新たにしなければならないと思います。

ところで、聖書では、人に名前を付けることができるのは本来は神様だけである、というふうに言われています。だからこそ、新約聖書では、イエス様とか洗礼者ヨハネ、もっとも大切な登場人物の名前は、人間が「どういふふうになまえを付けようかなあ」と考えたのではなくて、「こういふふうになまえを付けなさい」と言って天使からお告げを受けた、ということになっています。だから、マリア様にしてもザカリアやエリザベトにしても、その通り、神様から告げられた名前を生まれてきた子どもになまえを付けるということになります。

そういう意味では、わたしたちは全部が神様から直接神様からお告げを受けて子どもたちに名付けているわけではありませんけれども、新しく命をいただいた者に名付けるという行為は、神様のなさることに成り代わって、親なりその周りの者が代わりにしているということなので、謙遜に、そして愛と知恵をもって名付けなければならない、ということが出来ます。これからも人類は新しく生まれてくる子どもたちに名前を付け続けることになるでしょう。その時に、ほんとにその一人ひとりの命に対する尊敬の心をもって、愛のうちに名付けられますように、神様の助けを願いたいと思います。

一方で、聖書の中にはふさわしくない名付け方をされてしまった人というものも出て来ます。その一番代表が、最初の男女の女でありますエヴァです。エヴァは、人間が神様から離れたあとに、アダム、男によって勝手に名前を付けられてしまった。エヴァというのは命という意味だから良い名前のように思いますが、命の源というのは、本当は神様なんです。そしてまた、女性というのは単に命を生み出すというだけの存在ではないはずなのに、神様から離れた男の視

点で、命を生み出す者、エヴァっていう名前を勝手に付けられてしまっているんです。罪の一つのしるしと捉えられています。わたしたちは、そういう意味で、神様から離れた者が勝手に相手を規定して、このような者だというふうに決め付けることがいかにみ心から離れて、そしてお互いの関係を断裂させるかということをも聖書を通して実は思い出さされているということが言えます。名前を付けるということだけではなくて、相手はこういう者なのだというふうに自分の視点で決め付けることはできないことも改めて思い起こさなければならぬわけですね。

「父と子と聖霊のみ名によって」って、神様のことをこのようにお呼びすることを教えていただいたとしても、わたしたちは神様のことを完全に理解して、このような方だと決め付けることができないのと同じであります。

でもそのようにして相手をお呼びしなければコミュニケーションが始まらない、しかし、相手を勝手に決め付けて、そして自分の視点だけで名付けることをしてはならない、ということです。だから、学校などですべてのあだ名を禁止するというのは行き過ぎかもしれませんが、例えば子どもたちがお互いに相手が喜ばないような呼び方で呼び合うというようなことは注意していかねばならない。子どもだけではないかもしれませんが。

わたしたちは、今日神様から、神様をどのようにお呼びしたらいいのかを教えていただいたということに感謝すると同時に、しかし、神様はこういう方だ、と自分の思いだけでは決めることは出来ない、その神秘の前に頭を下げるという思いを新たにいたします。同じように、人間同士も相手の名前を知っているということに感謝すると共に、しかし、その相手のことをわたしたちは完全には決め付けることができない、神秘である、そしてその神秘の前にはふさわしい態度は頭を下げ、尊敬することなのだということを思い起こしながら、神様との繋がりの中に、わたしたち人間同士もお互いの繋がりが恵みに満ちたものになりますように。このごミサを通して、互いのために、存在そしてそれぞれの名前を感謝し、またお互いが恵みを伝達し合うことができるように助けを願い合いながら、このごミサをお捧げしたいと思います。

---

ミサ説教はカトリック高円寺教会ホームページの「ミサ説教」のページにも掲載されています。

PC <http://www.koenji-catholic.jp/cgi-bin/wiki/wiki.cgi>

携帯 <http://www.koenji-catholic.jp/mobile/>